

## 鹿児島大学病院における口唇口蓋裂患者に対する社会活動

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
顎顔面機能再建学講座 口腔顎顔面外科学分野

西原 一秀，中村 典史

口唇口蓋裂は，顎・顔面の形態異常およびそれによる種々の口腔機能障害を伴う先天異常で，それらの障害が患者および家族に与える苦痛ははかり知れないものがあります。

口唇口蓋裂患者は現在，日本人では500人に1人の割合で生まれると言われ，鹿児島県では年間30数名の患者が出生し，鹿児島大学病院には近隣地域からの紹介患者を含めて年間40数名の新患者が訪れています。口唇口蓋裂患者が正常な社会生活を営むためには，出生直後から成人に達するまでの間に，手術を中心として哺乳指導や口腔衛生指導，言語治療，歯科矯正治療，補綴治療さらに心理的問題など多岐にわたる治療が必要です。従って，これらの治療が円滑に行われ，所期の目的を達成するには各診療科の専門医ならびに言語聴覚士，看護師，歯科衛生士など多くの人々の協力体制に基づく一貫治療が不可欠です。

鹿児島大学病院歯科診療棟では，口腔顎顔面外科，口腔外科，小児歯科，矯正歯科，口腔保健科，義歯補綴科の各科歯科医師ならびに看護師，歯科衛生士，言語治療士，臨床心理士らによる口唇口蓋裂専門外来が設立されており，チームアプローチによる一貫治療の充実と向上に努めています。

口唇口蓋裂専門外来は月1回定期的にスタッフによ

るミーティングが開催され，「往診体制の整備・確立」，「治療困難症例の検討」，「学内および国内外の講師を招聘した口唇口蓋裂公開勉強会の主催」，「口唇口蓋裂治療の手引きならびに案内パンフレットの作成」，「鹿児島県口唇口蓋裂親の会「もみじ会」の活動支援」，「海外医療援助活動の参加」など，さまざまな活動を企画し，実施してきました。

患者の診療は，口腔外科外来に各科の歯科医師が赴いて，哺乳床装着や手術前後の管理，言語治療など共観しながら治療を進めています。また，口唇口蓋裂患者は出生直後から哺乳障害，審美障害などの問題を抱え，患者家族も今後の育成・治療に多くの不安を抱えています。このような不安を解消するために口唇口蓋裂専門外来では，治療内容を記した「診療手引き」を産婦人科に配布するとともに出生直後から県内産婦人科に往診して口蓋床の装着や治療内容のオリエンテーションを行い，出生直後から患者ならびに患者家族を支援しています。

口唇口蓋裂親の会「もみじ会」では，年2回の総会・学術講演会の開催とレクレーションを行っています。今年度は「家族内で話そうよ！親から我が子へ伝えたいこと-誕生からいままで」と題した告知に関する講演会と，夏には総勢70名程による平川動物公園のピク



ニックを開催しました。口唇口蓋裂専門外来では、このような親の会の活動を支援し、医療に関する情報交換の場を作るとともに、患児を抱え育児に苦悩する家族を支援しながら口唇口蓋裂児を取り巻く社会環境作りについて家族と共に取り組みたいと考えています。

さらに、広く国内外の口唇口蓋裂医療の発展に貢献したいと考え、ミャンマーやベトナムなどアジア発展途上国における海外医療援助活動にも参加しています。われわれは、平成19年12月21日から29日までベトナム・ホーチミン市の南に位置するベンチェ省、グエン・ティン・チュー病院で行なわれた口唇口蓋裂海外医療援助活動に参加しました。ベトナムでは患者への無料手術、ベトナム医師・看護師への医療技術移転、医療器材の譲渡などの支援が主に行われ、他に障害児学園の訪問、現地医師や看護師との夕食会なども催され、現地スタッフと交流する機会にも恵まれました。参加者は日本ならびに韓国からのボランティアの医師・歯科医師および看護師など総勢45名で、手術は移動日や手術器材の準備日、休日を除いた4日間で実施されました。現地の1日は、朝6時の起床から始まり、朝食を兼ねたミーティングが終了後、直ちに病院へ出発し、8時頃から3つの手術室に分かれて手術を行います。手術の終了後、夜20時過ぎにホテルに戻って夕食とミーティングが行われ、就寝は22時頃です。今回の医療援助では1日4件ずつ4日間で計45名の患者さんに口唇形成術や口蓋形成術が行われました。医療機関や保険制度の整った日本では口唇形成術は概ね生後3、4か月に行われ



ますが、ベトナムでは3歳頃まで手術されていない患児も多く、口蓋裂に至っては大人になるまで未手術の症例も少なくない状況です。まだまだ今後の医療制度などの改善が期待されるところです。

今後も、口唇口蓋裂を専門とするスタッフ間の連携を密にして治療内容の充実と技術の向上を目指し、口唇口蓋裂患者が心身ともに健康な状態で社会生活が営めるような環境づくりに取り組んでいきたいと考えています。